



脳性まひ児の心理 (A Psychological Study of Cerebral Palsied Children)

Helle H. Nielsen 著
(永井昌夫 大村 実 訳)

患者および障害者にとって、いい病気とかいい障害というものはあるはずがないが、適切な治療プログラムをたてることにより、機能回復が目に見える整形外科的疾患者にくらべ、脳性マヒ者の治療は暗中模索と言い得るのではないだろうか。たしかに、早期治療が唱えられ、一歳未満の乳幼児が、整形外科病院やリハビリテーション施設といわれている所に通院し、あるいは、地域の訓練会が開かれている。また、神経学的ないろいろな説のもとに多様なテクニックが使われ、一応の治療効果をあげてはいる。しかし、脳性マヒに携わる多くの人たちの中で、脳性マヒとは何であろうか、何をなせばいいのであろうかと、日々悩み、行きづまっているような人も多いことであろう。病的反射の亢進、筋肉の過緊張、言語障害、知能障害はもとより、知的には一応障害がないと思われる患者に、いわゆる perception の障害があり、立体認知が出来にくく、他の訓練にも影響を及ぼす……等どの障害をみても、前途を憂えざるを得ないのである。

脳性マヒについての治療テクニックや病理の文献は、かなり多く紹介されており、我々セラピストの大きな手助けとなっている。しかし、脳料マヒの多くが知覚の障害を併って

おり、これに關しての十分な日本語の文献はほとんどないと思う。本書は、その知覚—運動障害を中心に、脳性マヒの心理にスポットを当てたものであり、我々の心待ちにしていたタイトルととえよう。

内容は文献的考察と研究課題の2部に分かれており、さらに細かく、1部では、脳性マヒ児の心理、器質時脳障害の問題点、病型とその障害等について述べ、知能と身体障害の重さとの関係、認知知覚の障害と病型との比較、また、行動やパーソナリティの障害、および非障害児との比較など、多くの文献をもとに読者に考える課題を与えている。そして、さらに2部において、著者は、コペンハーゲン大学病院外来での、40名の6~15歳の産性マヒ(IQ 75以上)と、そして同数の統制群との比較研究を多角的に述べている。研究方法としては、Rey 迷路検査、身障児用絵画統覚検査、立方体検査、物語完成検査、ロールシャッハ検査、ビネー検査の8つを用い、主に視覚—運動障害、学習能率、パーソナリティの3つについて、検査を実施し分析している。これらの検査法については、かなり詳細に述べられており、各テストの特徴をつかめるので、心理に素人の読者にとっては、大いに参考になると思う。さらに、この後

教師や両親との面接により、家庭と学校での状態、学業成績と環境への適応等について述べてある。最後に1人の軽度右片マヒ児の症例をあげ、9歳、12歳、15歳時のテストを中心に、問題をわかりやすく述べており、今までのことをまとめるのに大変親切なはからいといえる。第1部で多くの文献を見、多くの課題を与えられた読者は、第2部で具体的に考え、まとめることができるので、多少ほっとするかもしれない。脳性マヒの知覚障害、心理的なとらえ方などは、系統だった心理的研究をしていない者にとっては、大いに学ぶところがあるし、各心理テストや研究報告は、多くの心理的アプローチがあることを示し、参考になるといえよう。しかしながら、直接治療にたずさわる者としては、この様な多種多様なテスト結果をどのように生かし、いわゆる問題のある脳性マヒ児に適用し、指導をしたのか、また、すべきであるかについて、ふれていないのは残念な気もする。しかしながら、脳性マヒ児に積極的な関心を持っている臨床場にある人々には、医師、セラピストを問わず、広く勧められる著書である。

(医歯薬出版 A 5判, 246 ページ,

2,100 円)

(神奈川県立身体障害者更生指導所,
作療法士, 吉見契子)